

# メカジキ 南大西洋

Swordfish, *Xiphias gladius*



**管理・関係機関**

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

**生物学的特性**

- 体長・体重：下顎叉長 4.68 m・500 kg
- 寿命：調査中
- 成熟開始年齢：調査中
- 産卵期・産卵場：熱帯～亜熱帯域
- 索餌期・索餌場：アフリカ沿岸・ウルグアイ沖合水域
- 食性：調査中
- 捕食者：調査中

**利用・用途**

刺身、寿司、切り身（ステーキ）、煮付け

**漁業の特徴**

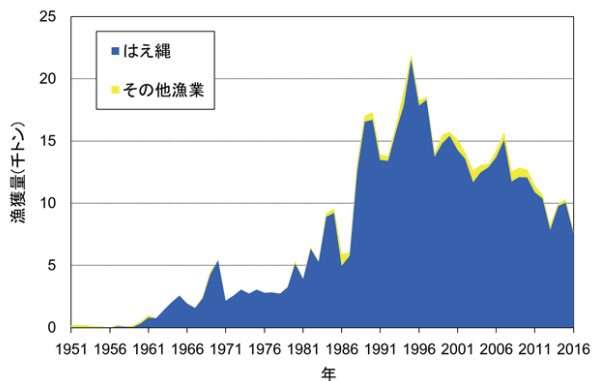
1980 年代末まで主に日本、台湾、韓国のはえ縄の混獲として漁獲され、漁獲量は少なかった。1989 年から本種を目的にはえ縄の浅縄操業を行うスペインの船団が参入し、漁獲量が増加した。

**漁獲の動向**

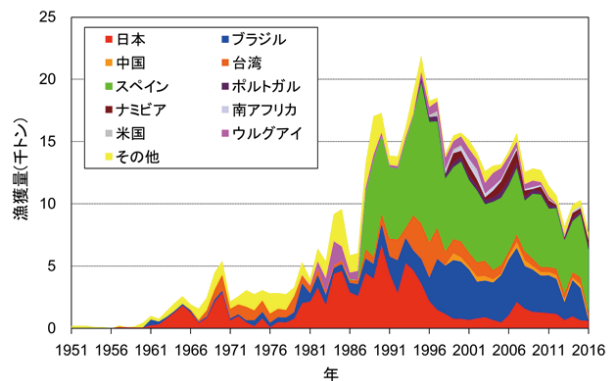
はえ縄の混獲であった 1980 年代末までは、総漁獲重量は 1 万トン未満と少なかった。本種を対象としたスペインのはえ縄船団が参入した 1989 年から漁獲量が急増し、1995 年には総漁獲量は 21,930 トンでピークとなった。1995 年以降は、規制の導入、努力量の他の大洋への移動及び主対象魚種の変更により漁獲量は減少している。2016 年には 7,725 トンとなった。日本のはえ縄漁船は、主漁場が北大西洋に移り、努力量の減少で漁獲量も大幅に減少し 2016 年の漁獲量は 639 トンと 1995 年以降で最低を記録した。

**資源状態**

最新の資源評価は 2017 年に ICCAT の SCRS によって 1950~2015 年までのデータを用いて実施された。資源評価には Just Another Bayesian Biomass Assessment (JABBA) 及び Bayesian Surplus Production 2 (BSP2) が用いられ、資源量指数と将来予測の計算には JABBA が、感度解析には BSP2 が使用された。両モデルともに資源量指数として、日本、台湾、スペイン、ブラジル、ウルグアイ、南アフリカのはえ縄の資源量指数を使用した。2 種類のモデルによる本種の資源評価結果の結果は概ね一致していた。JABBA の結果から本種の資源状態は乱獲状態にあり、漁獲は過剰漁獲の状態ではないものの、MSY レベルに近いことが示された。また、SCRS は、JABBA を用いて 2028 年までの将来予測を行った。漁獲量を既存の TAC (15,000 トン) とした場合では、10 年後に MSY レベルに回復する可能性は 26% であり、50% の確率で資源量と漁業を MSY レベルにするためには漁獲を 14,000 トンに減少させる必要があることが示唆された。



南大西洋におけるメカジキの漁法別漁獲量 (1951 ~ 2016 年)

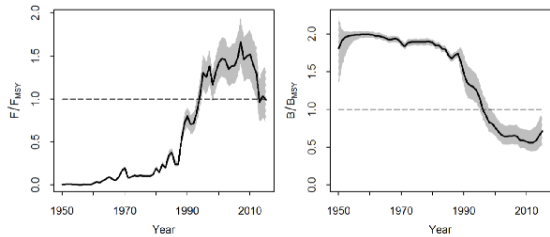


南大西洋におけるメカジキの国別漁獲量 (1951 ~ 2016 年)

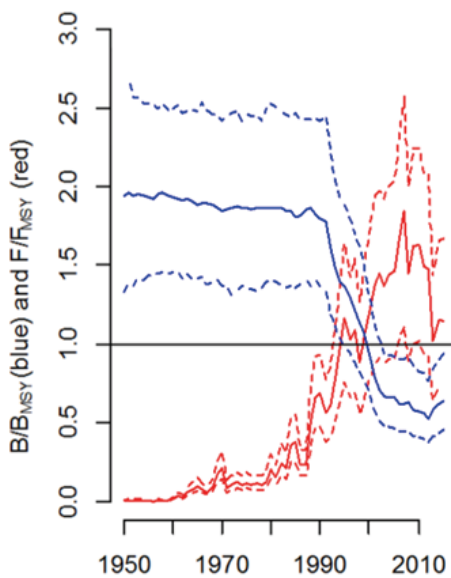
**管理方策**

ICCAT は 2014 ~ 2017 年の間、各年 15,000 トンの TAC を設定していたが、2017 年の年次会合において、2018 ~ 2021 年までの TAC を 14,000 トンとした。日本の割当量は 901 トンである。国別割り当て分を超過もしくは余った場合には、2 年以内であれば差し引き・上乘せを行い調整することができる。ただし、調整分は前年の割り当て量の 20% を超えない範囲とする。

現在、大西洋全域について、①下顎又長 125 cm / 体重 25 kg 未満の個体の水揚量を 15% 以下に抑える、または②下顎又長 119 cm / 体重 15 kg 未満の個体の水揚量を 0% にする（投棄量の評価含む）、という 2 種類の最小体長規制がある。2006 ~ 2008 年の大西洋全体で水揚げされた 125 cm 以下の個体の割合は 24%（尾数）と推定されている（北系群では 28%、南系群では 20%）。



JABBA で推定された相対資源量 ( $B/B_{MSY}$ : 右図) 及び相対漁獲係数 ( $F/F_{MSY}$ : 左図)  
点線は 95% 信頼区間。



BSP2 で推定された相対資源量 ( $B/B_{MSY}$ : 青線) 及び相対漁獲係数 ( $F/F_{MSY}$ : 赤線)  
実線は推定値、破線は 90% 信頼区間。

メカジキ (南大西洋) の資源の現況 (要約表)	
資源水準	低 位
資源動向	増 加
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	7,725 ~ 10,686 トン 最近 (2016) 年: 7,725 トン 平均: 9,380 トン (2012 ~ 2016 年)
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	639 ~ 1,162 <sup>*1</sup> トン 最近 (2016) 年: 639 トン 平均: 824 トン (2012 ~ 2016 年)
管理目標	MSY: 約 14,600 トン
資源評価の方法	Just Another Bayesian Biomass Assessment (JABBA) 及び Bayesian Surplus Production 2 (BSP2) による。
資源の状態	$B_{2015}/B_{MSY}=0.72$ (0.53 ~ 1.01) <sup>*2</sup> $F_{2015}/F_{MSY}=0.98$ (0.70 ~ 1.36) <sup>*2</sup>
管理措置	<ul style="list-style-type: none"> <li>2018~2021 年の TAC を 各 年 14,000 トン (日本の割り当ては 901 トン) とする。国別割り当てについて、割り当て分を超過もしくは余った場合には、2 年以内であれば差し引き・上乘せを行い調整することができる。ただし、調整分は前年の割り当て量の 20% を超えない範囲とする。</li> <li>下顎又長 125 cm / 体重 25 kg 未満の個体の水揚量を 15% 以下に抑えるか、下顎又長 119 cm / 体重 15 kg 未満の個体の水揚量を 0% にする (投棄量の評価含む)。</li> </ul>
最新の資源評価年	2017 年
次回の資源評価年	未定

<sup>\*1</sup> この値は日本の近年の漁獲割当量を上回っているが、これは、ICCAT の合意に基づいた過去の漁獲割り当ての未消化分の漁獲が含まれているためである。

<sup>\*2</sup> Just Another Bayesian Biomass Assessment (JABBA) の中央値と 95% 信頼区間。